

---

**基調講演**

---

## 現代オーストラリアの大衆文化

—— 言語, 歴史, そして真実 ——

ケイト・ダリアンスミス

メルボルン大学

オーストラリア人はこれまで、いささか古くさいが依然として一般的とされている国民性の固定観念に従えば、非常にぶっきらぼうな国民であるとされてきた。農村部の男性労働者やブッシュマンは、国粹主義者の書いたものを通じて、また1880年代と1890年代の *Bulletin* 紙の影響もあって、友情と創意発明の気風が強く、しかし概して口数が少ない者として描かれてきた。このようなブッシュマンの特質の典型とされ、さらに英雄にふさわしい忍耐力も備えていたのが、第一次・第二次世界大戦を戦った伝説のアンザック連合軍であり、彼らは—— ずうずうしい反権威主義を許容する能力を持ちながらも —— ものごとを率直に言うことで有名だった。第二次世界大戦の後、オーストラリア国内の文化批評が一般大衆の洗練さの欠如と独りよがりの島国根性を嘆き悲しむようになると、その説明としてしばしば、オーストラリア人全体に広く浸透している、“高い”あるいは“教養のある”（あるいは英国の標準的な）言語様式の発音の不明瞭さと、この言語様式に対する国民の気後れが引き合いに出された。もちろん例外はあり、植民地時代のオーストラリアでは多くのアイルランド移民たちがアルコール好きと“群れを成したがる”性質のために、しばしば他の人々から浮いていた。

1960年代と1970年代に台頭した演劇と映画における文化ルネッサンスは、オーストラリアの国民性とされるこの控えめな性質を、様々な様式を通じて社会と自己表現のなかで探求していった。これに含まれるものとして、当時はまだ新しいのものであった“リアリティックな”演劇研究があり、たとえばRay Lawlerの有名な演劇 *Summer of the Seventeenth Doll* (1955年)では、結婚生活と家庭生活を円滑に運ぶことができない男の無能さは、感情や行動において無能である以上に、コミュニケーション能力の不足であるとされた。ま

た、たとえば映画 *The Adventures of Barry McKenzie* (1972年) に見られるように、特に非常に“洗練”された英国文化の価値観と比較すると、ぞんざいだがしかしユーモラスである“オッカー”のふるまいと言語上の特徴の賞賛を通じたオーストラリア文化の不遜な改造も、これに含まれている。

実際、人々に好感を持たれるこのオッカータイプの人物像——この紋切り型は国民性、なかでも特に男性の国民性の一番極端なイメージによる部分が大きいが——は、確かに今もオーストラリアの文化から姿を消してはおらず、またオーストラリア人が自分たちの国が外国でどう見られているかを予測する際にも、この人物像は消えていない。1980年代全体を通して、また1990年代の初頭まで、長期にわたって成功し続けたオーストラリア観光協会のキャンペーンでは、映画クロコダイル・ダンディーで一躍有名になったポール・ホーガン起用して、海外の観光客をオーストラリアに呼び寄せた。ホーガンは、独特でおおらかなアクセントと言葉を選んで使いながら、また一緒に“シュリンプのバービー (バーベキュー)”をしよう、と観光客に呼びかけた。最近、ホーガンのオーストラリア“タイプ”の化身が、“クロコダイル・ハンター”に登場している。スティーブ・アーウィンは現在、出演しているテレビ番組が世界25カ国でシリーズ放映されており、彼自身、クイーンズランドの“名誉”観光大使に任命されている。アーウィンは簡潔というよりもむしろ饒舌で、そのふんだなおしゃべりはあるいは歯切れがいいと受け取られるかもしれない。それでもテレビを見ている人たちにとって、オーストラリア人もオーストラリア人以外の人にとっても、アーウィンの魅力の一端は彼の使う慣用句と語彙の独自性にあると説明できるだろう——この独自性とは、まさにオーストラリア人のアイデンティティに訴えかけ、このアイデンティティの上に成り立っているものである。

オーストラリアの言語の独自性は大衆文化の領域だけにとどまらない。20世紀末オーストラリアのもっとも有名な詩人で、海外でも広く評価され、今もその評価は高まっている Les Murray は、極めて独自性の強い言い回しで——様式的な言葉遣いで、オーストラリアの風景と歴史を呼び起こし、社会と政治に対して論争的な視点を持ち、オーストラリア式に変化した言語を豊富に用いた言い回しで——書いている。もちろん Murray は、土地の言葉であると同時に広く西洋から学んできた文学の伝統にも根ざしている、国粋主義者の言い回しを意識的かつ自信を持って用いている数多くのオーストラリア人作家の一人である。

テレビのパーソナリティと詩人の言語から、私は独自の国家の——ならびに大衆の——文化の定義における言語の役割について少し考えてみたいと思う。英国人がオーストラリアに住み着いた当初、イギリス諸島から持ち込まれた多数の方言、英国人以外の移民の言語、そして先住民の言語が融合したところに、オーストラリア英語とオーストラリアのアクセントが生まれた。実際、植民地式の会話と植民地式の行動形態は、19世紀全体を通して新しい移民やこの土地を訪れた人たちの注目——賞賛と嫌悪の両方——を集めた。20世紀に

入ると、オーストラリア英語はすでに多くの大衆の関心をひきつけ、一連の書物でその研究対象になっていた。“オーストラリアニズム”に対する誇りは、しばしば過激な国粋主義というコンテクストのなかで論じられた。しかし第二次世界大戦後、極めて重大な移民計画が打ち上げられて、オーストラリアへの非英国文化の注入が社会と文化に多大なるインパクトを与えると、オーストラリア英語の独自性を記録に残そうとする非常に重要な学術プロジェクトが行われた。1981年初版の Macquarie 辞典は、特にオーストラリア文化に照準を合わせた一つの参考文献だった。この文献やその他の参考文献のなかで、過去も現在も使われていてオーストラリア英語の構成要素となっている言葉や表現が 10,000 前後あることがわかった。こういったもののなかにはアボリジニの言語からの借用や、民間伝承された言語の派生語やそれを語幹にしているものがあり、その一方でオーストラリア人のアイデンティティや生き方の独自性が現れている言葉もある——“ディガー”や“オージー”、“オッカー”といった言葉がこのカテゴリーに入る。この膨大な数のオーストラリア英語の宝庫は——もっと一般的な意味での英語と同様——新しい言葉が次々に入り込んできて常に進化し続けており、新しくない言葉の日常生活での使用は毎日の使用のなかでどんどん廃れていっている。

世界がコミュニケーションの様式と知識の普及においてどんどんグローバル化していくなかで、オーストラリアの言語もまた、他の場所から入ってきた言葉によって進化を——以前よりも急速な勢いで——促されている。オーストラリア英語とオーストラリア文化の慣習の“アメリカナイゼーション”は従来以上に広い範囲でひとつの傾向となっており、この傾向が 20 世紀全体を通じてオーストラリア人から相応の関心をひきつけてきたことは確かである。そしてマーケティング、通商、管理政策信奉者が用いる国際言語は、大衆の領域の言語にも影響を及ぼしており、特にここ数十年はその傾向が顕著である。かつては政治家の演説の原稿執筆者でもあった歴史学者 Don Watson が書いて最近ベストセラーになっている本は、いつの間にかオーストラリア人の生活に（そしておそらくそれ以外のあらゆる場所にも）入り込んでいる新しい公共の言語に対して批判を提示している。それは経営と官僚制度の言語であり、政治と政府の政策の、文化的な制度とメディアの言語である。Watson はこう言っている：

公共の言語は公務員の言語である。政治とビジネスの指導者と公僕の言語——公式の、形式ばった、時として高尚な言語である。それは指導される側の言語というよりも指導する側の言語、管理される側というよりも管理する側の言語である。このような言語には実に様々な形態がある。形が整っていて修辞性に富んだものから、定まった形を持たず、さまざまなものが混じりこんでいて、はっきりとしないものまで。しかしどのような場合でも、それは力と影響力の言語である。私たちの責務は、誰に投票すべき

か、どの携帯電話のプランを選ぶべきか、である。こういった場面すべてを公共の言語が支配している。力と影響力がひろく浸透しているように、その言語もひろく浸透している。私たちは一番高いレベルでも一番根底のレベルでも、この言語を読み、聞いている。そして言語は権力から生まれ、多くの場合、弱者はこれを話し、真似することを強制される<sup>1)</sup>。

Watson は、この種の公共の言語の増殖は、オーストラリア文化の土台になっている言葉を“暴力的に破壊する”と訴えている。しかし“真実”を言えば、新しいコミュニケーションの形式が大衆の領域に浸透することによって危うくなるのは、言語に対する能力なのである。Watson の最大の主張はこうである。現代オーストラリアの政界のリーダーたちは、この陳腐で、わけのわからない月並みな言葉をもった新しい言語を利用して、政治や様々な出来事に関して、大衆を誤った方向に導いたり、あいまいにごまかしたり、あるいは混乱させてきた。現首相ジョン・ハワードが、おそらく何の作為もなしに好んで使っていると思われる“普通のオーストラリア人”の言語ですら、政治的なアジェンダにそぐうように緻密な計算がなされている。もちろん、これは政治の世界において決して新しい手法ではなく、この世界では“政治の策術”は一つの信条になっている。しかし Watson は、このようなオーストラリアの一般的な生活における言語の変容を、単に言語の術学者たちをいらつかせるものとしてではなく、オーストラリアの社会に存在している民主主義の流れにとって重大な意味を持つものと捉えている。

言語は、国家のアイデンティティの定義と国家への帰属意識にとって重要な要素であり、そして——この中心的な命題から敷衍すると——ひとつの社会の内部における力関係にとって重要な意味を持っているのが大衆文化の言語である。私はここ数ヶ月、言語の力とそれが影響を及ぼす領域について随分いろいろなことを考えながら、オーストラリア人の演説を選び出して本にまとめ、紹介するという作業をしてきて、この本を今年の終わりごろに出版する予定である<sup>2)</sup>。この演説集は、オーストラリア人は社会の領域に関する事柄についての演説となると——オーストラリア人にまつわる神話とは対照的に——口下手とは程遠いということをはっきりと私に確信させた。実際、18世紀末から現在に至るまでの公の場での演説を見つけ出しこれを読んでいく作業のなかでもっとも刺激的だったことの一つは、そこで使われている言語が実に生き活きとしていて、思想と希望が実に情熱的に語られている

1) Don Watson 著, *Death Sentence: The Decay of Public Language*, クノップ社刊, シドニー, 2003年, pp. 1-2.

2) Michael Cathcart と Kate Darian-Smith 著, *Great Words: Australian Speeches*, メルボルン大学出版 (印刷中, 2004年).

ということであった。

この18世紀末から現在に至るまでの間、オーストラリアの政治家、判事、起業家、労働組合、市民そしてその他の活動家たちの関心事は何だったのか。演説集に収められている公の場での演説のうち一番最初のもは、1788年、流刑囚と海兵隊を乗せた最初の船団が、先住民エオラ族の土地であるシドニー・コーブに上陸した直後に行われている。新しい英国の流刑囚植民地の総督アーサー・フィリップは、流刑囚を浜に集めるよう指示し、そこで流刑囚たちに対して、公共の利益のためにはいかなる寛大な処置も容認するつもりはなく、不正な行為を働いた者は処罰すると告げた。この断固たる法と秩序の主張は、忠誠と歓喜の祝杯で迎えられた。その日は、少なくとも権威者らにとっては、祝賀ムードのうちに暮れていった。

19世紀のあいだ、オーストラリア植民地の定住者たちは、大人数が集まって屋外で開かれる会合で、植民地議会の場で、講演会、劇場、大学で、法廷で、そしてデモや抗議の行進において、人々の前で積極的に意見を述べた。彼らはオーストラリアへの流刑囚移送の継続に反対する意見を述べ、自分たちの代表者からなる政府をどのような形態のものにするべきか、広く議論を展開した。彼らは“母なるイギリス”、大英帝国、中国、日本と植民地の関係について語った。平等な土地の分配を主張し、税金や教育、民主的で自由な報道の必要性、そして参政権——特に女性の参政権——について、賛否両論を戦わせた。労働者、失業者、アボリジニ、女性などの権利を定義する演説が行われた。そして、労働者、アボリジニ、女性、非ヨーロッパ移民の権利の制限を要求する演説が行われた。1880年代末から、多くの演説が連邦制度の必要性について語り、政府の責任を連邦政府と州政府のあいだでどのように分けるべきかを論じた。

20世紀に入っても、こういったテーマの多くは一般市民の生活のなかでの話し合いや議論で引き続き論じられた。新しい声——それまでは公共のコミュニケーションに加わることを拒絶されていた人々の声——が、公的な議論の場で聞かれるようになった。すなわち、女性やオーストラリアの先住民、英国以外の国の出身者たちの声である。また、反政府主義の過激な意見を持っている人たちに関する大掛かりな調査も行われ、政策と治安に関するファイルによって、公の集会に参加して戦争や徴兵制度、資本主義、検閲、等々に対する反対意見を述べている何千人という数のオーストラリア人の謄本が明らかにされた。世界におけるオーストラリアの位置づけに関する議論も増え、そういった議論は戦争——第一次・第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして一番最近ではイラク戦争——において極めて重視された。国家の安全保障をどのように実現していくのか？ 防衛協定の交渉を、特にイギリスやアメリカ合衆国とどのように進めていくのか？ そしてオーストラリアは、どんどん重要性が増しているアジア地域での国際貿易関係をどのように“マネジメント”していくのか？ それ以外にも、公共の分野に不意に投げかけられた議論として、

オーストラリア文化の変容について語り、いかにして一致団結した社会を構築するかを論じるものもあった。そしてもちろん、この二世紀にわたる公の場での議論を貫いている一つの焦点は、誰がオーストラリアの一員としてふさわしいのか、という問いである——移民をどう“管理”すべきなのか、誰が移民としてあるいは難民としてオーストラリアに入国してもいいのか、そしてオーストラリアの国境をどうやって守るのか、誰がオーストラリア人なのか。

私の本の終わりにある現代の公の場での演説は、オーストラリアの大学における調査研究と知識世代の重要性を論じ、環境の持続可能性の問題を検討し、オーストラリアにやってきた不法難民の処遇の仕方に疑問を投げかけ、今後、先住民と非先住民の和解について考える形を模索し、オーストラリア先住民が現在置かれている状況を改善する方法を熟考し、世界的な“テロに対する戦争”に対するオーストラリアの姿勢、なかでも特にアジア太平洋地域でのオーストラリアの対応を説明し、そしてオーストラリアの遺産とアイデンティティという概念が意味しているものは何なのかを探索している。このような長くて広範囲に及ぶ論点のリストは、今回のこの論文のなかで私が現代オーストラリアの大衆文化と称している文化を支配しているものである。この論点のリストに、さらに公共の議論で語られているその他の領域も加えることができる。すなわち、高齢化が進むオーストラリアの人口動態の変容；家庭生活と雇用の間の緊張関係；富の分配とオーストラリアの富者と貧者のギャップの拡大；健康と教育における国家の役割；政治家とメディアの説明責任；グローバリゼーションがテクノロジー、貿易、文化に与える影響；そして国際問題におけるオーストラリアの役割。このような広範囲におよぶ懸念のなかには、はっきりと国家の輪郭を示しているものがあり、その一方で、他国と共有している問題もある——たとえば、私たちがみな、政府の説明責任を求め、報道における言論の自由を求めていることは間違いない。

上に掲げたような論点のリストは、新聞の社説や投稿欄、聴取者参加のラジオ番組、テレビの時事番組、インターネットのチャットルーム、公に開かれた講演会などで取り上げられている。実際、公に開かれた講演会は社会のコミュニケーションの一形態であり、その人気はこの5年ぐらいのあいだにオーストラリアで高まりを見せている。たとえば、2001年にメルボルン・フェスティバルの一環として開催された“連邦制度”の講演シリーズには、何千人という人たちが参加し、私の町ではなんらかの形の公開討論やディベートが行われぬ日はないくらいだった。このような活動に参加し議論に加わっているのは一握りのオーストラリア人でしかないというのは確かに事実だが、(少なくとも都会の中心部において)それは重大な意味を持つマイノリティであり、またオーストラリア人の余暇の過ごし方に関する調査によれば、重要であると思われる問題に関する地域社会の話し合いへの参加は年々増加している。1990年代の地域の話し合いグループへの参加のオーストラリア全域での広まりは、今は解散してしまったアボリジニ調停評議会の後押しのもとに進められたもので、“ソフト

な”政治活動とでも名づけたい活動の形態が、コミュニティとその社会のなかでどのように発生しうるものなのかを示す好例となっている。

そこで私が主張したいのは、過去二世紀にわたって、オーストラリアという国は単に個人的な興味や日常生活に関する事柄だけでなく、民主主義社会において重要な問題についてもよく話す人たちの国であった、ということである。そしてこういった会話、問い、議論はすべて、私たちの政治的な生活と文化的な生活を変える潜在性を秘めた、極めて重要な不意の発言となる可能性があり、また政治と文化の活動に対する新しい報道の形を導き出すことで、グローバリゼーションが進み知識と情報がほぼ瞬時に伝わる世界においてオーストラリア人は自分たち自身のことをどのように考え、自らをどのように位置づけるのか、という問題を突きつける可能性を秘めているのである。このような世界の状況のなかでこそ、国の文化に対するオーストラリアの定義は新しい刺激を得る。そこで私は、言語、力、真実の関係をもう少しじっくり考えたいという気持ちになった——そして私は歴史学者であるから、現代オーストラリアの大衆文化が過去の遺産によってどのように形成されているかの考察に、ここで少し目を向けたいと思う。

1980年代以降、オーストラリアにおける歴史学の分野は前例のない内省時代に入った。オーストラリアの歴史は、英国の歴史とは対照的に、大学である程度つまこんだところまで教えられるようになったのが第二次世界大戦以降であった。戦後史に関する研究や書物の多く、たとえば歴史学者マニング・クラークの著作物といったものは、国粋主義者の衝動によって生まれたものだった。それ以外の学者たちは、1970年代から、植民地時代とそれ以降の時代のオーストラリアにおけるジェンダーの歴史や民族、種族の歴史を探究し、民族に対する寛容さの欠如、移民、文化の多様性といったことの歴史を掘り下げていた。もっとも重要なこととして、Henry Reynoldsのような歴史学者たちが定住者とアボリジニの境界線で行われていた暴力に関する歴史を発表すると、“オーストラリア人の大いなる沈黙”が破られた。

学問における歴史がどんどん多様化していくのに伴って、新しい調査研究は大学や学校のカリキュラムに浸透していき——ここでもやはり、おそらくもっとも重要なこととして、民族との関係という意味でのオーストラリアの過去に焦点は据えられた——、これに加えてこの20年間、膨大な数の政府出資の歴史的なイベントが行われ、オーストラリアの遺産に対する新たな関心が呼び起こされた。そのような歴史的に屈折した出来事のなかには、1988年の建国二百年記念祝典、2001年の連邦制百周年記念祭、キャンベラの国立オーストラリア博物館やメルボルン博物館のような代表的な歴史博物館のオープン、歴史観光や歴史的遺産を重視した経済の刷新、そしてオーストラリアの比較的新しい過去の“真実”に対する社会の認識が、必ずしもバランスのとれたものではないにしろ、高まっていること、などがある。アンザックの日の式典の参列者数は急激に増加し、歴史は活字媒体と電子媒体を通

じてほぼ毎日呼び起こされ、オーストラリア人の解説者たちは混迷する国内外の状況のなかに歴史的な解釈を見出そうとしている。実際、社会的な意味での歴史は、おそらくこれまでのオーストラリアのなかで一番重要さを増しているように思われる。そしてこれに連動して、いわゆるオーストラリアの大衆文化における一連の“歴史戦争”が起きている。すなわち、オーストラリアの歴史をどう教え、解釈すべきかをめぐる激しい争い、書物に記された歴史という学術界の慣習の引き延ばし、過去の出来事を政治化された現在に持ち込むこと、である。

国の歴史を学校でどのように教え博物館でどのように解釈するかをめぐる議論はオーストラリアに特有のものではなく、実際、多くの“歴史戦争”が世界のあちこちで起きている。たとえば1994年、アメリカ合衆国で、スミソニアン博物館の太平洋戦争50周年を記念した展示の解釈上の脅威を差し替えるという同博物館の決定をめぐる、歴史学者のあいだで大騒動が巻き起こった。当初の展示の概要は、ヒロシマの倫理上の正当性を熟考しようというものであった。合衆国議会の政治的な介入を受けた後、展示は、原爆投下の倫理上の正当性について何の疑問も示さないものになった。ドイツと日本では、国家が関与した事柄の歴史について学校や大学で教えるべきか、またどのように教えるべきかをめぐる議論が常にあり、これに類似した議論はロシアや他のポスト全体主義の国々でも起きている。

オーストラリアにおける“歴史戦争”は様々な道をたどっているが、今ここでその一つひとつを論じている時間はない。ただし、そこで問題とされているのは過去に対する歴史学者たちの解釈であり、彼らの解釈は、一直線に文明化が進んでいくという物語に比べて安心感がなく、問題が多く、混乱している。1990年代の中葉以降、現在のオーストラリア連邦政府、報道部門、そしてその他の保守的な支持者たちは、アジア移民に対する人種的な懸念とオーストラリア先住民からの暴力による土地の横取りが蔓延していたかつてのオーストラリアを批判的に論じる歴史学の仕事に異論を唱えてきた。特に歴史をめぐる非難は、先住民のコミュニティが打ち上げた土地権利の主張の信用性を失墜させることを狙っていた。すなわち、一番最初の頃の国家の同化政策の下、盗まれた世代であるアボリジニの子供たちは強制的に家族から引き離されたということを否定し、ヨーロッパ人のオーストラリアへの定住は平和なもので流血の大虐殺などかけられない、と主張しようとした。国立オーストラリア博物館とメルボルン博物館の展示の中の先住民の歴史の表現は断固たる批判的になっており、また国立オーストラリア博物館の黒人と白人の両方の歴史の表現に対する先日連邦政府の照会は、公共の施設に対して政府のコントロールを押し付けようとする露骨な動きであった。

歴史的な意味と現代のオーストラリアの両方において先住民の人々の場所に関する話題を拒絶する一部の解説者たちを詳細に分析するなかで、Tony Birchは、歴史をめぐる戦いのなかで危うい状況にさらされているのは“土地や国家のアイデンティティ、記憶といった



貴重なものである”と省察している<sup>3)</sup>。そしてもう一つ危うい状況にさらされているのが、ここで私は話の出発点に戻るのだが、過去の行為を曖昧にしたり解明したりするのに用いられる言語である。19世紀のフロンティアには言語に関する掟があった。すなわち、非常に独特で歴史の影響が色濃いオーストラリア英語の使用である。歴史に関する記録のなかでヨーロッパの定住者は、個人的にも公にも、おそらく大虐殺も含めたアボリジニに対するある種の暴力行為に言及する際しばしば“dispersal (分散)”という言葉を使っている。現代オーストラリアでは、過去の出来事に関して使われる公共の言語はどれもみな同じように遠まわしである。アボリジニの子供たちが家族から“引き離された”というのと、家族によって“放棄された”というのでは強調される意味がどう違うか考えてほしい。そして、話をWatsonに戻すと、歴史戦争のなかに台頭している陳腐さと月並みな決まり文句——なかでも特に、過去に衝突や戦闘があったことを認めるあらゆる歴史の仕事に対して無差別に使われる“黒い腕章”という言葉——は、あまりにもすべてを要約し簡略化しているため、こういったものがオーストラリアの言語に浸透すればするほど、事実上、何の意味ももたない言葉になっていく。

歴史とは、かつて学者の Meaghan Morris が言ったように、“何が重要であるかを私たちが定義する場所の名前”である。そしてもし歴史が問題となるのなら、言語も問題となる——なぜなら歴史戦争は、ますます複雑になっていく国家のアイデンティティを導き出している大小さまざまな“真実”の言語をめぐる戦いでもあるのだから。過去の意味をめぐる公の議論は、文化的多様性を持つオーストラリア社会の結合力について考える前提に異議を唱えてきた。そういった議論は、歴史家の活力を示しただけでなく、多くのオーストラリア人には自分たちの過去と現在を批判的な姿勢で考える能力があることも示した。というのも、オーストラリアの歴史に対する関心は低下するどころか、歴史書の売り上げはここところ上向きで、歴史協会の加入者は増加の一途をたどっており、大学の歴史講座の申込者も増え、そしてABCでは新しい歴史番組のシリーズの制作費に膨大な予算が当てられている。また、たとえば、定住者とアボリジニの過去に対するオーストラリア人の先入観について調査した歴史映画がこの二年の間にいくつか製作されている。Phillip Noyceの*Rabbit Proof Fence* (2002年)は非常に広く配給された。もちろん、こういった本や歴史関連の活動のなかには、心地よい過去の物語にしがみつくとことをオーストラリア人に奨励しているものもあるかもしれない。しかし“歴史戦争”に関する公の場での議論は、また盗まれた世代や土地権利——その歴史は現在にも波紋を起している——をめぐる起こされている訴訟や公

---

3) Tony Birch 著, “History is Never Bloodless: Getting it Wrong After 100 Years of Federation”, *Australian Historical Studies* 特別号, Kate Darian-Smith (編) *Challenging Histories: Reflections on Australian History*, Vol. 33, 2002年, pp. 42–53 に掲載。

の場での議論は、オーストラリア人が過去を特別に問題になってはいないものとして捉えることがますます難しくなっていることを意味している。そこで私の関心は、現代オーストラリアにおける大衆文化の役割に引き戻され、また国家にとって何が重要なのかという問いとその探求に、そして Watson が“力と影響力の言語”と名づけたものをこの民主主義のプロセスのなかで見出そうとする作業に引き戻されるのである。